

平成26年度 スーパーバイザー事業報告書

研究テーマ 「伸ばす力 育む心」

～小集団を活用した学び合いの中で、生徒同士をつなぎ、個の力を育てる授業づくりの研究～
米子市立美保中学校

スーパーバイザー：岡山大学大学院教育学研究科 佐藤 暁^{さとる} 教授

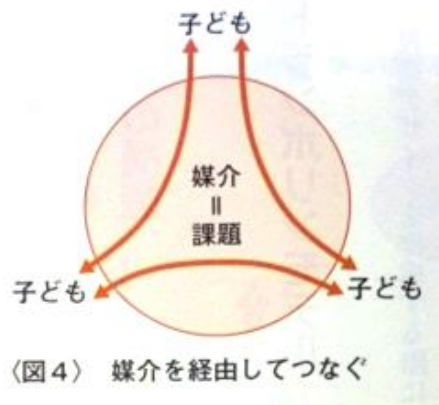
1. はじめに

本校は、米子市西部に位置し、全校生徒248名（男子126名、女子122名）の小規模校である。生徒には活気があり、体育祭で行われる縦割り活動をいかした熱い応援合戦は伝統行事となっている。生徒会も「いじめゼロキャンペーン」を行うなど活発である。

本校では、2年前より「支援を要する生徒の指導」「授業のユニバーサルデザイン化」「生徒同士の関わり合い」「言語活動の充実」を取り入れた授業実践に取り組んでいる。その中で、「支援を必要とする生徒に視点をあてた授業」についての取り組み、「授業のユニバーサル化」に関しては徐々に成果をあげてきているが、小集団を活用した「生徒同士の関わり合い」「言語活動の充実」あるいは個々の学力の定着についてはまだまだ課題を残している現状である。

2. 研究のねらい

上記の内容をふまえ、小集団を活用しながら生徒同士をつなぐ‘教え合い’や‘発表の聞きあい’など関わり合いのある授業（協同学習）を追求すること。そして下図のように生徒にとって「学ぶ値打ちのある課題」を用意し、一人ひとりの生徒を学びから降ろさない授業作りを実践していくことをねらいとしている。



佐藤 暁 著

「子どもも教師も元気が出る授業づくりの実践ライブ」

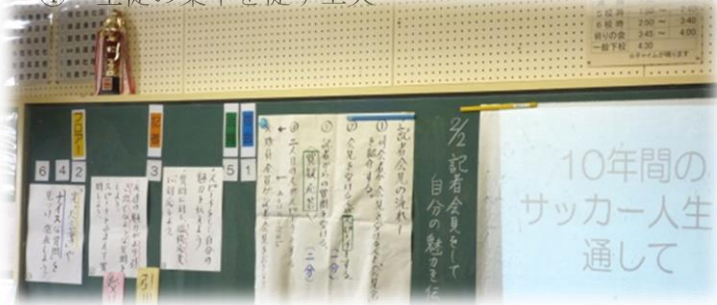
3. 研究内容

* 生徒同士の関わり合い

- ① 課題解決に向かって多様な意見を出し合う場面
- ② 課題解決に向かって自分の責任（役割）を果たす場面
- ③ 課題解決に向かって、互いに支えあう場面

* 授業のユニバーサルデザイン化

- ① 生徒に学習の見通しを持たせる工夫
- ② 生徒の認知特性を生かした掲示の工夫（視覚支援等）
- ③ 生徒の自分なりの理解を保障する工夫
- ④ 生徒の集中を促す工夫



3枚のカードを各教室に設置

学習のめあて

△本時授業のめあてを

学習の手順

△本時授業のプログラムを

学び方のめあて

△本時授業の学び方を

(例)理由をつけて説明できるようになる

* 言語活動の充実

[知的活動（論理や思考）の基盤]

- ① 事実を正確に理解すること
- ② 他者に的確に分かりやすく伝えること
- ③ 事実等を解釈し、説明することにより自分の考えを深めること
- ④ 考えを伝え合うことで自分の考えを発展させること

[コミュニケーションや感性・情緒の基盤]

- ① 互いの存在についての理解を深め、尊重していくこと
- ② 感じたことを言葉にしたり、それらの言葉で交流したりすること

4. スーパーバイザーによる指導助言

2014年 8月20日（水） 来校 講演

2014年12月 5日（金） 研究授業

教師側の用意した「学ぶ値打ちのある課題」に生徒がいかに関心を抱くかは、日々の授業づくり、教材研究にかかっていることは言うまでもないことで、その努力が生徒同士を結び、人間関係のよりよい構築につながっていくことになるとご助言していただいた。

また、子どもの「つながる先」を確保する必要があるとも述べられた。このつながる先=媒介を経由することは本校の授業づくりの目指すところであり、生徒の力を伸ばし、一人も学びから降ろさない最良の方法だと教わった。

5. 研究のまとめ

(1) 成果

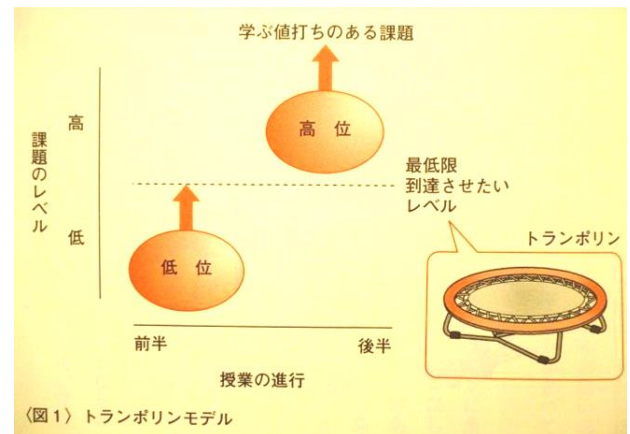
授業公開を全職員が心がけ、実践を試みた。その中でもジグソー法やリレー学習、エキスパートグループなど協同学習の技法も活用し生徒同士の関わり合いの充実を図ることで、言語活動の充実にもつながった。

また佐藤先生の講評では、授業映像をもとに生徒の動きに着目し、関わりが不得手な生徒でも授業課題次第で意欲が湧くことや支援の必要な生徒への手立ての仕方などを教授し、実践に役立てた。

(2) 課題

課題としては大きく3点が考えられる。

- ①学ぶ値うちのある授業への改革‘ジャンプ課題’の導入を心がけることが挙げられる。右図のトランポリンモデルは、授業前半はすべての生徒をトランポリンに乗せる課題に取り組み、後半には高位の生徒が跳躍できる課題を設定することで、低位の生徒も高位の仲間をモデルとして跳躍を試みようとするようになり、より生徒同士がつながり、学び合える場を生み出すことにつながると思われる。このような学習意欲の湧く課題設定いかにするかが今後の課題である。



〈図1〉トランポリンモデル

さしる
佐藤 暁 著

「子ども教師も元気が出る授業づくりの実践ライブ」

- ②言語活動も、他者に的確に分かりやすく伝える

だけでなく、感じたことを返すなど、それらの言葉で交流し合う場をつくることも言語活動のさらなる発展につながると思われる。

- ③さらに学びを個に返すことの充実の必要性もあげられる。単なる授業の振り返りだけでなく、学習した喜びをいかに感じさせるか、低位の生徒の学力の向上につながる工夫や活動も考えていくことが課題である。

6. おわりに

今年度、佐藤先生をスーパーバイザーとして招聘し、授業中の生徒の姿から生徒をみる視点の深さを学ぶことができた。それぞれの生徒の動作を分析すると、何が足りなくて、何を必要としているのかが少しずつだが見えるようになってきた。その視点を活かしながら今後の授業作りを進めていくことで、学ぶ価値のある授業を構築できると感じている。